



60年国勢調査(概数)

増加続く村の人口・世帯

5年前より406人・114世帯増

総人口8,992人・世帯数2,050世帯

五年に一回全国一斉に実施されている国勢調査が、昨年十月一日現在で行われましたが、村の人口、世帯の概数がこのほどまとまりました。

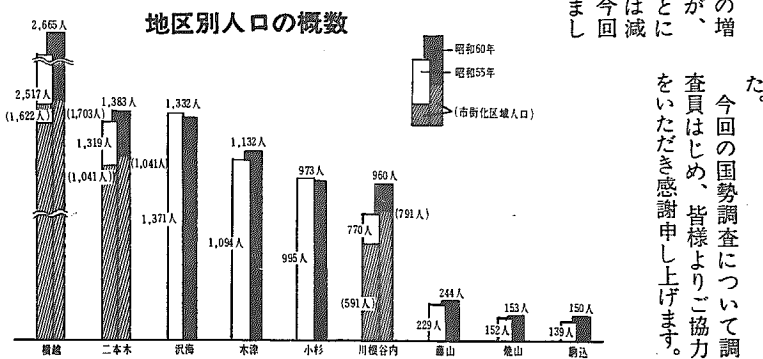
新潟市の近郊農村である横越村も宅地造成が進み、前回の昭和五十五年の人口が増加に転じましたが、今回も着実に人口が増加し、増加率も四・七%となり県内でも八番目の増加率となっています。

しかし、村内の地区別の人口増減にもバラツキがはつきりと出はじめています。川根谷内地区では大幅な伸びを示し、横越・二本木・駒込地区は着実に増加し、木津・藤山地区では減少から増加に転じています。一方小杉・沢海地区はわずかながらも依然として減少傾向にあります。

全体的に見ると、下水道などの生活環境整備が進んでいる、市街化区域で人口の増加

昭和55年との比較

世帯数	人口			
	総数	男	女	
昭和60年	2,050	8,992	4,344	4,648
昭和55年	1,936	8,586	4,161	4,425
増減	+ 114	+ 406	+ 183	+ 223



今回の国勢調査について調査員はじめ、皆様よりご協力をいただき感謝申し上げます。

村行政改革

第二次中間答申出る

民間委託や受益者負担を

昨年発足して、村の財政の危機を救うにはどうしたらよいかと審議を精力的に進めていた村行政改革推進委員会(会長菅我広見)では、村から諮問された五項目のうち、審議会・委員会の統廃合、負担金・補助金の適正化については、すでに八月に第一次中間答申が出ましたが、このたび三項のうち事業の見直しについて、審議を終え十二月十日、第二次中間答申書を村長に提出しました。

この答申書によると、村の行っている事業について村民負担の上で不公平なものには受益者負担の導入を、また民間委託すべきとされている。民間委託のよい行政を進めると、事業によっては民間へ委託すべきとされています。

受益者負担の導入をはかるとして行っている事業には、役場以外の公共施設の維持管理経費、公共下水道の建設費及び維持管理費、生活道路の舗装事業、民間に委託すべきとされている。

村政こん談会で

地域の課題を語り合う

地区がかかえている問題を村と地区住民が話し合い、よく考える村政こん談会が、各地区で行われましたが、このほど横越地区など二地区で行われ、全部で五地区が終了しました。

通学路などの事故防止を

地元・警察・村で充分協議し、対処したい

【横越地区24人】
◎通学路などの事故防止
住民朝のラッシュ時には、通学道路も車が多く通り、大変危険な状態であるので、速度制限や取り締りを実施

してほしい
村指適した道路は交通規制をしたい。しかし、関係住民も多いので、地元、警察の三者が現地を見て検討をしていきたい。



12月8日 横越公民館

◎下水道工事
住民下水道の進行状況が遅いようだが、もっと早くならないのか。
村全体計画の三十%が進捗しており、下水道には毎年三億円の投資を行っている。

下水道には補助もあるが、大部分は借入金で賄っている。その借金返済もあり建設費に向けられる分は少なくなっている。今後も努力して進めていきたい。

◎幼稚園
住民幼児教育が大事と思う幼稚園を作ってほしい。
村現在の保育園でも幼児教育に力点を置いており、教育面では劣らないと思う。また、保育園の定員割れという誠に厳しい状況もあり難しい。

駒込十字路に信号機の設置を

道路改良と同時に設置をしたい

【藤山・駒込地区20人】
◎裏郷埋立地の今後の計画は
住民埋立地の今後の計画と運動広場計画は、
村ゴミ埋立地は五十八年度より不燃物処理を行っているが、その他の余地には現在下水道の残土を入れ被覆用土としている。三月までには残土入れを終わる予定で、そのところにはゲートボール場と狭いが野球場を作りたい。しかし、これらはあくまでも不燃物処理中の暫定利用であるのでご理



12月13日 藤山会館

解を願いたい。
将来は野球場一面、テニスコート一面を作ること

しているが、更に角地に築山を作りたいと考えている。
◎赤道の道路改良の促進を
住民車も多く通り、危険な状態なので促進を願いたい。また、十字路に信号機を設置してもらいたい。
村国、県の厳しい財政事業のなかで、今年度よりやく一、〇〇〇万円の予算がつけたい。今後も強く要望していきたい。また、道路改良と同時に信号機を設置したい。

このほか、中学生の通学時の背負カバンの使用や、自転車通学でのヘルメット着用、道路改良、裏郷舗装道路の清掃などが話題になりました。

横越農村公園が完成

夢ふくらむ 遊具がいっぱい



子どもたちも喜んで大はしゃぎ

九月中旬から工事を進めてきた横越農村公園(川根谷内)

が、十二月七日完成しました。この公園は、村が推進している農村モデル事業の一つとして、総工費一、五〇〇万円をかけて整備したもので、村内で二ヶ所目になります。場所は、川根谷内須賀神社前、面積は三、一〇〇平方メートルあります。

公園には、子どもたちの喜びそうなジャングルジム、混成遊具、ブランコ、砂場などのほか、東屋や水洗トイレがあり、周囲にはアペリアやツツジなどの花木が植えられ、子どもからお年寄りまで幅広い年齢層が楽しめる憩いの場となっています。

食事こそ 家族のきずな

④ 女子栄養大学教授 食生態学 足立己幸

授業に出なくなってしまう中学生の食生活を調査したことがありますが。驚くべきことに、調査した八人のうち七人までが、一週間、家庭で一度も食事をしていませんでした。

彼らは、朝食を取らずに学校へ行き、夜は外で何か食べてから帰宅する、という生活を繰り返してしまっていました。

外食が増えれば、食べ物の中味からは自然と野菜が減り、限られた種類のインスタント食品を食べる割合が増えます。こうした食生活を何週、あるいは何か月も繰り返していると、栄養は偏り、青少年の体によくはない影響を及ぼすことは明らかです。

また、不規則な食生活のために体調を崩し精神的にイライラするなど、不安定な感情を

さらに助長させてしまわないとも限りません。

会話を交わせる場

成長過程にある子供の心理状態は、だれでも不安定なものです。学校の成績や交友関係などで、毎日が試行錯誤の繰り返しなのです。それだけに、ふだん、親や兄弟と考えることを交わし合うチャンスができるだけ作ってあげることが大切です。

しかし中学生ともなると、親子で何かすることも、顔を合わせずともめめつきり減ってしまうのが一般的です。とすれば、ふだん家庭生活の中で何気なく会話を交わすことのできる食事こそ、親子関係のあり方に重要な役割を果たすのではないのでしょうか。

子供がいわゆる非行への誘惑に引きずり込まれそうになっても、日ごろの家族同士のきずなが強ければ、子供自身が気がつかなくても親が気づくこともあるでしょう。毎日子供と一緒に食事をすると、食事の時間があれば、子供の心理や行動のちょっとした変化にも気づき、適切なアドバイスを与えてあげることが

食卓、悪い食卓

えていた子供も逆に反発したくなってしまいます。

小言やグチは 食卓で「禁物」

ところが、親の権威(主義)が強すぎて、逆に食事の場が親子関係をぎくしゃくさせてしまうこともありま。

子供と顔を合わせるの食事の時だけ、とばかりに小言を言い続けたり、仕事や家庭内のグチをこぼされたのでは、子供もたまったものではありませんか。本来、楽しいはずの食卓で、「遊んでばかりいないで勉強しなさい」と、こんな言葉ばかり浴びせられたのでは、これから頑張ろうと考

よい



食事、親子が一緒に食べていさえずればいい、というものはありません。ぬくもりのある食卓で家庭が子供の心のより所となるか、家庭を嫌いにさせ非行の芽を芽生えさせてしまうか—それは、毎日の食事のあり方の積み重ねと関係が深いようです。